

## 京都文教大学臨床心理学部 開設記念対談\*

- ・対談 山折哲雄（宗教学者）  
           鑪幹八郎（京都文教大学学長）
- ・司会 岡田康伸（京都文教大学臨床心理学部長）

**岡田：**それではこれからの進行は、私が司会をさせていただきます。真ん中に座らされてまして非常に困っているのですが、左を向いて右を見てという感じで、タイマーを見ながら進めていきます。

それでは対談ですので、まず鑪先生から山折先生に何か話してほしいようなことを、まず問うていただくことから始めたいと思います。先生よろしくお祈りします。

**鑪：**今日の、死と誕生というテーマで山折先生のお話を伺って、何か少し、本当に刃で貫かれたような、何か厳しい、あれは鶴見俊輔型ですかね、先生。先生のお話自体がね。

**山折：**自分にできないことを言っているわけですから。

**鑪：**自分を晒すというか、何かすごいなという印象を、最初に持ちました。

先生の中にどこかで、前にちょっと控え室でお話ししていたのですが、小林秀雄に対するご批判のようなものと、それからもう少し情念を大切にできないのかというお考えがあったような感じがしたんですけど、その点について先生何か一言、言っていただけるとありがたいのですが。

**山折：**戦後の日本というのは、感覚が非常に乾

き上がってきていると言いますかね、情念的なものの考え方は前近代的で封建的なものだという、そういう考え方がずっと戦後民主主義の展開のなかで広がってきたような感じがありましたね。

そういう考え方が出てくる背景はよく分からんですけれども、しかしやっぱり人と人との交流、人間と人間の間を律しているのは、情理相い備わった言説っていうんでしょうかねえ。パトスと論理・ロゴスの両方で説得したり自分の気持ちを伝えたりという、それがやっぱりロゴス一辺倒になってきているような感じがありましたね。

そういう近代主義的なものの考え方を強めてきたのは、戦後の、まあ戦後派の批評の一つの性格だったのではないかということがある。その代表者の一人が、例えば小林秀雄さんになりますね。

**鑪：**小林秀雄さんですね。

情念の復活という意味では、臨床心理学はまさにそういう、そこを目指していると言うか、知的な世界だけとか、あるいは心の世界との分断や分離、あるいは分裂というものを何とかつなぎたいと。それがわれわれの生き方に少し安らかさを回復するというか、そういうことではないかということ。ですから、そういう情念については、われわれとしては非常に関心が高いですね。

ただ心理学のなかでも、また二つに分かれていまして、一方では、そういうものを全部排除しようと、これは研究の領域としてはうまく扱えないと、だから扱えないのはもう置いて、扱える方をやっていこうというね。そうすると

\* 本稿は2008年6月15日に行われた、京都文教大学臨床心理学部開設記念講演会及び特別対談の記録である。

知的なものとか学習とか、あるいは目に見える行動とかね、そちらのほうにずっと偏ってきているという感じがするのです。

**山折:** はい、はい。例えば、先ほどの話のなかで無常観ということを申しましたけれども、『平家物語』という作品がありますよね。『平家物語』は、戦後になりましたですね、いろんな歴史学者や国文学者の方がお書きになって、結構いろんな層に読まれているんですね。私の印象で言いますと、例えば石母田正さんの岩波新書に入りました『平家物語』というのは、これは大変なベストセラーになりました、こんにちでも読まれ続けている。

あの石母田正方式の『平家物語』の読み方というのは、活字として、テキストとして読んでいるんですね。目で読んだ『平家物語』の世界ですよ。そうなりますと、結局『平家物語』の魅力というのは合戦の場面だということになります。合戦の場面で人間の様々な個性が表れてくるし運命が描き出されて、ここがいいんだと言われる。

確かにそれはそうですけれども、しかし『平家物語』の一番重要なところは冒頭の言葉であって、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」ですよ。これが無常観を最も典型的なかたちで表現している言葉だと思うんですけども、それを目で読みますとなんだか仏教臭いんですね。古色蒼然（こしょくそうぜん）としたものにしか映らないわけです、読んでいますと。

ところが、例えば上原まりさんのような、筑前琵琶の伴奏で語りを聞くと、そくそくと伝わってくるんですね。そのほうがこの平家の世界、歴史的世界に参入できると思う。人間の運命、合戦場面における人間の運命そのものに対する理解も深まると思う。やっぱりあれは基本的には耳で聞くものです。

そうすると目で見て解釈したり分析したり

するのは、もっぱら理性やロゴス、分析的思考の方面であって、耳で聞く感情の世界というのは、これは別なだと分離されていくような気がして、それがさっきおっしゃった心理学では、そこを統合することが必要だという問題につながっていくんだらうと思いますね。

戦後教育の基本は、目で見て視覚でとらえて理解するという、これが非常に強調されてきた。そのひずみがいろんなかたちで、こんにち表れているような気が致しますね。

**鑑:** 例えば、日本のいろいろな古典文学とかね。文学だけではありませんけれども、日本の音楽ですね。小学校や中学校、高等学校で、音楽の授業になると全部西洋音楽で。琵琶も出てこないし、琴も出てこないし、三味線も出ない。ああいう点もやっぱりそういうものにつながりますかね。

**山折:** そうですね。実は、今からもう二十年くらい前でしょうか。確か『毎日新聞』の投書欄に、ある若いお母さんがこういう投書をしているのが、目にとまりました。

それは、自分の子どもに日本の伝統的な子守歌を聞かせたと、するとむずかり出したと言っていますよ。おかしいと思って、もう一回ゆっくり子守歌を聞かしてやったら、今度は布団をかぶってしまったと、こういうんですね。おかしいなと思って、それを投書したんですね。



そうしたら数日たった今度、全国からいろんなお母さん方から同じような悩みを訴える投書が殺到したというのです。それで『毎日新聞』の編集部でそういう記事を出したのです。いったいなぜだろうと。結局、編集部では原因をつきとめることができず、そのままになったんです。

私は気になって、その記事を切り抜いて、自分なりに考えてみたんですけれどもね。やがて翌年になって、その問題に関心を持った藤原新也さんという方がおいでになって、これはカメラマンでありエッセイストでもあるんですけれどもね、その人が、原因はおそらく当時垂れ流しにされていた民放のコマーシャルサウンドに問題があると。集めて分析したところが、コマーシャルサウンドのほとんどが長調の音楽だったと。マイナーな悲哀の曲は一つもなかったというのですね。

そうすると今の子どもたちというのは、生まれてからすぐ母親の膝で、テレビを聞いて、コマーシャルのサウンドを聞いて育っていて、マイナーモードは全然聞いていないわけですね。悲哀、悲しみの感情を受け付けられないような、そういう子どもが大量発生しているんじゃないかということを書いています。現代は短調排除の時代だと言うわけですよ。

それで、私は、それを読んでから、京都と大阪のミュージックショップ、ちょっと調べ歩いたことがあるんです。今の幼児教育から低学年教育のために作られている音楽教材の中身はいったいどういうものだろうか。

調べましたら、日本の伝統的な子守歌はほとんど採用されていない。『五木の子守歌』もなければ『中国地方の子守歌』もない。なるほど短調排除の時代というのは、学校教育がそういうことを推進してきたのだということが分かって、家庭のお母さん方もそれを聞かせないとい

うことになったのではないかと思ったんです。

ところが、じゃあ子守歌は全然教えていないかということ、そうじゃないんですね。先ほどおっしゃったように、『ブラームスの子守歌』と『モーツァルトの子守歌』はちゃんと入っているのです。

鑑：入っているんですね。

山折：これはもう明治二十年代の国定教科書の中にちゃんと採用されて以来、ずっと歌い継がれている。

子守歌の最もいいものが、ヨーロッパのものである。これは中産階級の家が背後になっているのですけれどもね。日本の子守歌のような差別と貧困を絵に描いたような、そういう世界じゃないわけですから。

それはまあ、日本の国家としては当然の政策だったと思いますけれど、同時に悲しみの感情を十分に体験させることを怠ってきたという、そういう結果がこんにちの状況を招いているのではないかということですね。

日本の伝統的な子守歌を歌おうではないか、歌わせよう、聞かせようという、そういう運動が、今ようやく起こり始めている段階ではないかと思いますね。

鑑：だからその情念を回復するというか、カウンセリングやサイコセラピーでね、私たちがやっているというのは、結局、今先生がおっしゃったように小さいときから教育された、その悲しみとか寂しさとか、それから、つらさとか苦しさというのを自覚するというか、それを自分のものとして受け止めるという力がね、ほとんどないわけですね。

普通はどうするかということ、全部それを隠してしまうか、排除するか、あるいは押しえつけてしまうか。だからそれをもう一回、回復するというのが実際はとても大変な仕事としてね。そういうことを感じますけどね。

山折：そういう点では、人と人との別れの場面とか。その別れというのは悲しみを誘う場面、機会でもありますし、その究極の場面というのは死ぬ場面に直面するということですよ。

鑑：そうですね。

山折：その死という問題は、先ほど申しましたように、いろんな分野で、隠され始めている、隠され続けているという問題がある。そうするとやっぱり、悲しみを体験する重要な場面を真剣に考え直されていないということですよ。

鑑：実際に心理学、特に臨床心理学のなかでは、悲しみを再体験することは、とても重要な仕事の一つとして、そこにかなり集中しますよね。まあ私たちは、「喪の仕事」という言い方をしているんですけど。

それで、何とかしてそれを体験しようとする、それも一人ではなくて、カウンセラーと一緒にそれを再体験するという、この関わりのなかでね。それがやっぱりとても重要な仕事じゃないかなと、そういう感じは持っています。

それは生と死というのとは少し違って、別れの体験とか、それから別れたい人ともう一度出会う体験とか、そういうものなのですけどね。

山折：ある老人ホームにおける、老人の方々の心の癒やしのために、いろんな音楽療法の試みが行われているという、具体的な報告がありますが。私あるとき非常に関心を持ったのが、そういう場面でモーツァルトを聞かせることと、美空ひばりの演歌を聞かせることと、どちらが効果があるんだろうかということ、前から関心ありました。

岐阜県だったかどこかの老人ホームで、やったところがあるんですね。そうしたら、演歌のほうが、はるかに老人方の心の癒やしには効果があったというんです。まあ実験の仕方、データの取り方、いろいろあると思いますけれども、あるという。

それが出てからしばらくして「いやあ、モーツァルトもすごいよ」と言うので困っているんですね。日本人というのは両方ありますからね。モーツァルト的な世界と演歌的な世界、両方入り込んできて。情念の世界も非常に多層的じゃないですかね。

鑑：ありますね、確かにね、先生おっしゃるとおり。

ちょっと話が飛躍するかもしれませんが、お酒の中にね、音楽を聞かせて熟成するというのがありますよね。

山折：ああ、そうですね。

鑑：それでね、モーツァルトがやっぱりいいそうですね。

山折：そうですね。ワインではなくて。

鑑：ワインではなくて。焼酎のなかに、モーツァルトを聞いて育った焼酎というのがあるんですよ。

山折：それ、液体に聞かせるわけのですか。

鑑：液体に聞かせるんです。

山折：ああ。

鑑：ですからやっぱり何かね、だからその酒の酵母にね、何か影響があるのかと、面白いなあと思いましたけど。

山折：あの、アメリカの心理学者がやった実験がありますね。植物を栽培していて、それにいろいろな音楽を聞かせるんですね。そうすると、そっちを向いてくるやつと向いてこないやつと、そういう音楽があると言うんですね。それで、やっぱりモーツァルトが何か基準になっているようですね。

鑑：向こうはね。

山折：向こうは。

鑑：こちらだったら美空ひばりでいいということでしょうか。

山折：どうでしょうか。そこまでは。

鑑：先生が特にご関心のなかで、美空ひばり、

あるいは演歌のテーマに、やっぱり情念をどう歌うかとか、情念をどう取り入れるかと、それが一番日本人の心に合っているという、そういうお考えがおありのような感じがするんですけど、そう考えてよろしいでしょうか。

**山折：**それはもう、先ほど先生がおっしゃったように、心理療法の基本に喪の要素というのを非常に大事にされている。悲しみの感情というのは大前提だと言われている。

美空ひばりという歌手は、ご承知のようにいろんな才能がある人で、ジャズでもロックでもオペラでも何でも歌いこなせる歌手ですけども、昭和40年代から演歌一本に絞り込んでいくのです。一切のほかの可能性を全部捨てていく。

なぜ彼女は演歌に絞り込んでいったのかというと、やっぱりその悲哀の感情こそが人々を癒やす、心の底から救済するという、そういうことを直観していたからではないかという気がするんですね。

先ほども、『悲しい酒』ではないですけども、結局あれは一人酒ですよ。悲しい酒の究極は一人で飲む酒。そうやって飲んで涙を流して、酔っぱらっているうちに、どっか禊（みそぎ）じゃありませんけれども、洗われてしまうというところがありますね。これは心理療法の効果と非常によく似ているという気がしますけどね。

**鑑：**そうですね、そういうところがね。歌の場合、エンターテインメントと言いますよね。楽しみのためと言う。美空ひばりと言ったら、それは癒やしのためと言う。やはりちょっと違いますよね。

**山折：**両方彼女はクリアしていますね。癒やしとは、表面的には言わないでしょう。

**鑑：**言わないでしょうが。

**山折：**あくまでもエンターテインメントで。

『悲しい酒』を歌うときに、私もよく言うのですが、ひばりさんは二曲目、二行目で涙を流すんですね。それで四行目歌い上げるときには涙が乾き上がっているんです。完全に涙をコントロールできているんですね、歌いながら。これはすごいことですよ。それはかなりエンターテインメントの要素が強いなという感じがするんですね。

**鑑：**聞いている人は、むしろ癒やされるのですね。それを聞いてね。

**山折：**そう思います、それは。演技が絶妙です、そういう点ではですね。心理療法家もそういうところあるんじゃないですか。そういう演技者という。

**鑑：**演技者ねえ。やはり演技するところはあるかもしれませんね。

例えば面接の空間というのを、かなり特別視していますよね。だから、面接室のなかに入って来て出て行くときの、この空間。そこに入っている一時間なら一時間で、それをお互いに演じていると言えるかどうか知りませんが、非常に特殊な空間なんですね。

一步外に出ますと、というか若いカウンセラーが面接していても、面接している間は、この人は若いなんて思っていないんですよ。すごく年齢がいつているとか、成熟しているとか、すごく頼りがいがあるとか、お母さんみたいだとかね。そういうイメージでもって実際に話をしています。

ところが一步面接室を出ますと、「あれ、先生はお若いんですね」というようなことです。この空間から外に出るとね。ですから、そういう意味で非常に独特な空間があるのかなという感じはしますけれど。

**山折：**だから第二の自分が出ているということでしょうかね。

**鑑：**その中でね、ええ。それは普段の日常生活

では隠されている自分ですよ。それがときどき癖のように出てしまっていて、いろいろトラブルを起こすという。けれども全然自覚されていないという。そういう感じですよ。

**山折:** 一対一になると、また違った場になるんですね、そこが。

**鑑:** 特別な空間、ええ。

**山折:** 実は私、東北大学におりますときに、下北半島の恐山に行きましてね。七月、あそこにはイタコさんたちが集まってきて、仏降ろしをするわけですね。二十人くらい集まってきて、それぞれのイタコさんがテントを張ってやります。やっぱりそのテントの前に十人、二十人と並ぶんですよ。

私もちょうどその前の年に母親を亡くしましたから、行ったのは調査のためと思って行っているんですよ。どんな仏降ろしがあるか見ようと思って並ぶわけですよ。だんだん自分の番が近づいてくるに従って、目の前で何をやっているか見えてくるわけですね。

そうすると数珠をこうまさぐって、経文を読んで、だんだんトランス状態になるような、これも演技でしょう、それは見ていると。本気でトランス状態になったら二人、三人、四人と、もつものではありませんから。演技で神がかりになって仏降ろしをしているのが見えるのです。二十分、三十分して、「はい終わりました」と、金銭のやり取りをしているのが見えます。ああ三千円か四千円かというのがね。このお金のやり取りを見ていると、だんだんしらけてくるのです、近づいてくるに従って。

ああ俺も同じようなことやるのかと思って、最後そのテントに一人で入るでしょう。後ろの人は見ているわけですがけれど、ところが一対一になって始めますと気分が変わってくるんですよ。その方も同じようにトランス状態になって同じようなことをおっしゃるのですが、それが

母親の言葉のように聞こえてくるから妙ですね、あれは。

こちらは調査するつもりで行っているわけですが。

**鑑:** 本当に、その気になるのですよね、入ってしまうとね。

**山折:** これだなあ、心理療法のポイントは思ったんですけどね。

**鑑:** そういう何かこう、それをその象徴空間というような言葉で言えるかどうか分かりませんが、特別な空間というのはね。先生が一番最初にお話になった伊勢神宮の遷宮なんかもね、外から見ているとね、何かこう無駄なことしよるなどか、つまらないことをしよるなどかね、そういうふうに見えるけれども、先生のように完全に入ってしまうと、そこでは神の死があるし、神の誕生があるというのを、直に本当に体験するという、何かね。

**山折:** あれは不思議ですね。「こけこお」と、あの声を聞いたときから意識が変わりました。それに類したものは心理療法であるのでしょうか。

**鑑:** ありますね、それは。だから、それは面接室に入ったとき、ドアをぱたんと閉めたときから始まるような感じがします。それから、ドアを開けて出て行くときね。全然別世界に戻るといいます。

あれは、戻らないと困るんですよ、そのまま行ってしまったら。ですからやはり作られた空間ですけども、それがないと先に進まない。しかも、ただ知的な空間ではなくて、そういう判断力はどこかに置いていて、そして自分の内的な空間に向かってずっと入って行っているわけですね。カウンセラーもそこに一緒について行っている。そして本当に特別な時間と空間を作っているんじゃないかなという感じはしますけれど。

山折：ああ、なるほど。こういうことがありました。これはカウンセリングとは何かと、そういうこととは全然別個として、何かあるときにちょっと相談にあずかっている人がいたんですね。何か月かに一遍現れるのですよ。その人が来ると二時間、三時間費やさなければいけないと初めからあきらめておりまして、ホテルの喫茶室に入って聞くことにしていたんですよ。

あるとき、ずっと語り続けるんですね。私なんか言葉を差し挟む余地が全然ないんですね。こちらは黙って聞こうと思っているわけじゃないけど、こちらが介せないくらい、ずっと話を続けるわけですね。

それで一時間ぐらいたったとき、ちょうど台風季節でした。その喫茶室が外に向かっておりまして、外の光景がよく見えるんですね。だんだんに樹木が揺れ始めて風が強くなって、それが喫茶室の窓ガラスに当たり始めて、やがて雨が降り出してきて、暴風状態になった。そのときに、ものすごく熱心に語り続けていた人が、ひゅっと外を見たわけです。私も一緒に外を見た。

そのときに会話が途絶えてですね、じっと自然の変化を見ていました。あれはどのくらいですかね、十分、二十分、かなり長い時間でした。何も語らないで外を見ていました。それでまた、戻ったときに、かなり平静になっておりまして、今日はもうこれで結構ですと立ち上がって、普通するときよりは早い時間に帰られました。

ああ、やっぱりこういう場面では自然の要素って大事なのかと、自然に共に肩を並べて向かうということが重要な効果になるのかなと、ふと思ったことがあります。そのときに、これもカウンセリングというのはそういうものかもしれないと。普通、私なんか教えられるのは、浅い知識で知っているカウンセリングというのは対面ですよ。

鑑：そうです。

山折：対面で言葉を交わすという観点になっていますが、対面方式ともう一つは、肩を並べて自然を見る方式というのがある。これが交互に入ってくると、特に日本人の場合には効果的なのではないのかということまで、ちょっと考えたことがありますけどね。

鑑：先生はその際、長く覚悟して、この人と付き合おうという。

山折：そういうときはですね。

鑑：そういうふうにおやりになるんですね。そのときの時間というのは、どうお考えですか、時間枠というのは。これはもう語り尽くすまで聞こうということでしょうか。

山折：私も予定があったりしますからね。

鑑：はいはい、困りますよね。

山折：だからそこを何とか気づかせようという工夫は致しますよ、それは。なんとなく、それとなく気づかせるように。

鑑：時計を見たりとか、もぞもぞしたりとか。

山折：情けないですけども、本当にそうですね。

鑑：われわれの場合は、時間を区切るんですね、最初から。何時までにしましょうとか、ここで一緒に話すのは何分ですとかたちで。そうするとお互いにここでは終わるとい、始まって終わり。ですから誕生から死に向かってという、ここでとにかく終わると。幕はここで切れますよと、まだ続けるのなら、もう一回別な幕を引いて、ここで終わらましょうと。それを繰り返す。

ですから、時間がね、わりと重要な要素としてあるんですね。

山折：私なんかは、それはよく分かるのですが、その時間には起承転結があったほうがいいという、ドラマのような考え方ですね。

起・承・転・結か序・破・急か。速めるとき

は序破急でやっちゃいますけれども。そういうリズムをちょっと考えることがあります。

鑪：それが、お互いに了解しているこの時間の枠というのがあると、ひとりでにその序破急が展開するんですね。

山折：ああ、なるほど。

鑪：もう終わりということが分かっていますから、ずっと序で最後までいくということは、できないわけですよ。そうすると自分のなかでいつの間にか作っていくという、そういう感じはすごくしますね。

最初はね、なかなか語り尽くせない。それで「終わります」と言われますから、すごい不満が残るんですよ。何でこんな早く終わるんだと。ところが二、三回やっている、この時間のこの枠というのが、もうお互いにはっきり約束事として入る。するとここで話される起承転結のドラマとか序破急のドラマ、ここできれいに出てくるようになるんですね。

山折：私もそういうときによく、こうやって我慢して聞いていると、結局ガス抜きの儀礼かなと思ったりするわけですよ。そうすると教授会の場面を思い出す。大学の会議なんかをじっと聞いていなければならぬ。ああこの辺でいか、もう少ししゃべらせたほうがいいかと、これガス抜きですよ。

鑪：ガス抜きです。

山折：あれはどのようなのですか、つまらない。会議のね、あの流れというものと、このカウンセリングの時間というのは、違うと。

鑪：それは、相当違うと思います。

山折：違うでしょうね、それは。

鑪：ああいうとき、先生腹が立ちませんか。

山折：あのね、ガス抜きと思えばあまり腹が立たないですね。まだ、ああ序破急だとそこまで遊ばせんね。あまり遊びすぎてもいけないんですよ。

鑪：それはそうですね。

山折：ある程度こっちも困ってなければいけないわけですよ。

鑪：いやいや、ずっと付き合っているわけですよ。ですから、向こうが遊ぶのなら一緒に遊ばすけれど、遊ぶ気になっていないとき、こっちが遊ぶわけにはいかないですね。

山折：その辺の見極めが難しい。

鑪：そこところは、ひょっとしたらね、難しいことかもしれません。

山折：不思議なことに、そういうときには絶対終わってから一杯やろうやという気持ちにならないですね。

鑪：ああ。

山折：普通ならですね、一杯やって水に流そうやになるんですけども、これがそうはいかない。

鑪：どこが違うのですか。

山折：やっぱり、どっかこちらにも欲求不満が残っているのかもしれないね。その人と一緒に酒を飲んでも、とてもその欲求不満は解消されないと思っているのかもしれない。

鑪：それは解消されませんね。喧嘩になりますよね。

それで少し、中身でね、面接の中で、いつも考えているわけではありませんけれども、先生がお話になった親殺しのテーマというのがね、すごく私たちにとっても非常に重要なテーマのような気がするんですけど、あれはわりと西洋的な発想なんですか。

山折：私はどうもそう思うんですね。やっぱり学問の世界でも人間の関係でも、師匠と弟子の関係でも、やっぱりどこか乗り越えなければいかんと。

鑪：乗り越えるということですよ。

山折：それは、禅なんかでは「師に会いては師を殺し、仏に会いては仏を殺せ」ということを





言うわけですね。その殺すというのは、やはり乗り越えていくということですが、それは日本の禅の伝統ではですね、王殺しの感覚とは違うと思うんですね、やっぱりね。

鑪：違うんですか。

山折：ちょっと血なまぐさいにおいがします、やはり王殺しということが。

鑪：王殺しはね。

山折：身を切らして骨を切るという言葉は日本語にありますけれども、血を流すという感覚は、どうも「仏に会っては仏を殺し、師に会っては師を殺す」のなかにはないような気がします。どこかで許されたい、許したいという気持ちが働くのかもしれませんが、乗り越えながら。

あるいは、そのとき自分はどの程度純粹か、つまり無私の状態になっているかどうかということと、そのことが師を乗り越えていく、王を乗り越えていくということと、どこかでつながっているのかなという感じですね。

鑪：まず、師を越えるというのは結局、親との対決という意味では、ひょっとしたら返り討ちというか、反対に自分が殺されるかもしれない。そういう気持ちで実際に相手を殺そうとするという、そういう対決の姿勢がありますよね。

日本の場合は、それが対決ではなくて、何かちょっと迂回してしまうというか。どう言えば

いいのか、そのところがね、ちょっと分からないのですが。

私は親を乗り越えるということは、われわれの日常的なそういう感覚のなかで、それが心理学的に、あるいは象徴的に親殺しのテーマとして、今まで心理学のなかでも受け入れられてきていたのかなと思ったんですけど。

ああいう発想というのは、どこかで西洋的なものをいつの間にか日常的に受け止めてしまっているということなんじゃないかな。

山折：先ほどちょっと出しましたけれども、親鸞の悪の問題の根源にインドの『王舎城の悲劇』という物語があるんですね。それは子どもの阿闍世（あじゃせ）王が父親を殺して、王位を篡奪（さんだつ）するという物語なんですね。実際エディプスのような話なのですけども。

そのときに仏教の世界では、父親を殺して王になった人間は宗教的に救われるかどうかという問題がある。これはもうすでに仏教においては二千年の間、ずっとそういう問いを発しているんですね。

仏教の面白いところ、面白いというのは仏教らしいところは、救われるという考え方と、救われないという考え方と二つあるんです。親殺しの罪というのは、絶対それは重大な悪だという考え方でもないのですね。それはどっかで誰かによって救われたいという、こういう感覚があるということになると思う。

結局、親鸞はその問題を主体的に受け止めてどう解決したかということ、ここはもう難しいところなのですけども、私は、親鸞は条件付きで、人間は救われると考えていたと。

鑪：条件付き。

山折：父親を殺した人間は、ある条件を満たせば宗教的に救われると。その条件とは何かということが問題なのですが、一つは良き師につくということ、もう一つは深く懺悔（ざんげ）を

するということです。キリスト教的に言うと悔い改めるということで、その点で非常にキリスト教に近いのですよね、親鸞の受け止め方というのは。

ところが、近代以降日本の社会では、『歎異抄』の「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」で、これは無条件なんです。『歎異抄』のあとは。善人が救われるなら悪人は救われなはずはないという、そういう解釈できているわけですね。親鸞は無条件じゃないと思うんです。あれ、弟子の唯円が書いたものですからね、『歎異抄』は。

ところが日本の仏教界思想界はこの問題を無視してきたと思いますね。親鸞は無条件で救われると言ったという解釈をしたわけです。

ところが、ちょうどオウム真理教の事件が起こって、あの段階では麻原彰晃というのは重大な悪人であるわけですね。当然親鸞の『歎異抄』の論理に基づけば、悪人こそ救われるというのなら、無条件で麻原彰晃は救われるはずだということになるわけですね。そうすると困るわけですよ、今までの親鸞解釈というか阿弥陀信仰の問題は。

そこで私は、それは親鸞はちゃんと条件を二つ付けていると。麻原彰晃が良き師について深く懺悔をした段階で、初めて阿弥陀如来によって救われる可能性が出てくると。これが親鸞の解釈だったと。これは宗教界でも思想界でも、思想という問題にならないんですよ。

鑑：そうですか。懺悔というのは、誰かに自分の罪を告白するという、そういうことですか。

山折：それは、つまりキリスト教の世界においては、一神、絶対神に対して懺悔をするということになります。仏の前ということになりますね。それは絶対的な存在ではないのです。良き師、あくまでも師ですね。

阿闍世王の物語では、あそこでは師は釈迦な

んです。歴史上の存在としての釈迦なので、よ。だから地上の人間に対して懺悔をするということになります。

鑑：阿闍世王の物語で、日本精神分析学会の初代の会長古澤平作先生が、罪悪感の二つのタイプとして、一つは懺悔と、もう一つは西洋的な意味の罪意識があると言った。

その古澤先生の考える懺悔を引き起こす力は何かといったときに、阿闍世王の物語をテーマにされたんですね。阿闍世王は確かに王様、自分のお父さんを殺して自分が王様になった。

そのときに、まず、体にいろんな皮膚病が出て、すごく苦しみますよね、それが一つと。それからもう一つは、閉じ込められて、そのまま餓死するような状態を阿闍世王を助けた人がいた。それが阿闍世のお母さんだった。そうすると本当に懺悔を促進させて命を守るのは母の力ではないかというようなことを述べておられます。

ですから西洋的な親殺しのテーマに、それを今度は慰撫する対象としての母の力というのですか、それを古澤先生はしっかりお説きになっているんですよ。

山折：そうですね。ええ。

鑑：あれなんかとても印象的な感じしますけれど、先生なんかどう思われますか。そういう懺悔の問題、母のテーマね。

山折：あの古澤理論では、母親がまず母親のエゴイズムを捨てて、愛情で子どもを包むという、それで子どもは立ち直るといって、そういう母の力ですね。精神分析をする場合に、日本人の場合には、そのほうが効果的だと、実践例まで挙げておられますよね。

ですから、やはり私はそのとおりだと思うのです。そこはやはり西洋人の場合とは違う。エディプスコンプレックスとは違う。アジャセコンプレックスのほうが、日本人には合う、それ

は普遍的とまでは言いませんけれども、そうは思うんですが。

母の力、母の言葉ということを経験した日本の社会は最近言わなくなりましたよね。

鑑：ああそうですね。

山折：これが実はものすごい問題ではないかと、私は思っているんですね。それは、母の力と言うなら父の力を言えというような声が出てくるわけですよね。それはもちろんそうなのだけれども、その上でなおかつ母の力というのは大事だと、私は思っているのです。反時代的な意見かもしれませんが。

このあいだ、去年の夏に大阪で世界陸上大会があつて。

鑑：ありましたね。

山折：あのとき百メートル陸上の決勝レースがありましたね。世界で一番速いのは誰かということで、私はあのときずっとテレビにかじりついて見ていたんですけど。そうしたらね、下馬評に上がっていたのが、ジャマイカ出身のパウエルという選手と、アメリカから来たタイソン・ゲイという選手と、二人とも黒人なんですよね。

結局、決勝レースではタイソン・ゲイが勝つのですが、スタート地点ではライバルのパウエルに負けていたんです。70メートルくらい来たときには、肩一つ抜かれていたと。そのときに母の言葉がよみがえったという。あと終わってからのインタビューに答えているんです。

そのアメリカにおける母の言葉というのがね、「お前のやっていることは価値がある、信じてやれ」という母親の言葉がよみがえったと言うのです。0.001秒くらいのときに、本当にそんなことがあったのかと思うんですけども、それでそのとき、加速がついて抜いた。それでおれは優勝できたということを、そのレースのあとのインタビューに答えているんです

ね。

ああ、母の力というのはすごい。それが太平洋のかなたアメリカから聞こえてきたということで、それに対して日本の社会はいったいどうなっているのかなと思ったんですね。

もしかすると、今の古澤理論ではありませんけれども、母の力というのは、もっと普遍的な意味があるかもしれない。それを日本の社会は今どう考えているのかという、そういう疑問ですね。

鑑：親と子のつながりのなかで、親が親としてなりきれていないと言えるかもしれません。まだ自分がやるべきことがいっぱいあるとか、あるいは自分の欲求で満たしていないものを満たさなければいけないとかね。そうするとそのために子どもをほったからしにしてしまう。もう子どものことを構ってられないとかね。

山折：私個人の体験で言いますとね、私は母親とのあいだは、あまり良くなかったのです。父親に比べたら、母親って大嫌いでした。喧嘩もするし、ずいぶんいじめられもしましたけれど。ところが今この歳になって、よみがえってくるのは父親の言葉よりも母親の言葉なのです。これは不思議ですね。危機的な状況になると、父親の言葉なんてたいしたことがない。母の言葉は響くんですよ。これは何だろう、あんなに仲が悪かったのにと思うわけですね。

鑑：どういう声が聞こえるのですか。優しい声ですか。

山折：例えば。

鑑：やはり何か慰めてくれる声ですよ。「それでいいよ」とか、「大丈夫よ」とか、「信じているよ」とか。

山折：もっと具体的な状況なんですよ。母親は癌性腹膜炎で最期を迎えるんですけども、その末期のときに、胃腸が悪かったもんですからね、わたしらきょうだい何人かおまして、一

番下の人間が二人おったんですけれども、その末期のころですよ。「一番下の弟のことを頼むよ」と。これは響きましたですね。その後ずっとですね。そんなこと僕にかけてくれたことはないわけですよ。

それはやっぱり最期に息を引き取るときに、腹が膨れて苦しんでいるんですよ。悲惨な最期としか見えなかったんですけれども。その最期の、その最期の場面で、口をもごもご動かしておりました。それで耳を近づけて聞きましたらね、念仏を唱えておりました。親父もやっぱりそういう病気になって病院で死んでいるんですけれどもね。そういう場面はなかったですわね。

その場面があったからかもしれないけれども、その「一番下の弟のこと頼むよ」、そういう言葉が響くんです。そのほかにもありますけれども。

鑑：すごいですよね。遺言みたいなものですね。最期にね、先生にね。やっぱりそれが信頼感として響くところなんじゃないかな。

山折：そうなんじゃないかな。

鑑：あんたに預けたよと、しっかり面倒を見て！

山折：おまえしかいないよと、もう。そういうことなんだと思うんですが。

父親というのは、善良ないい親父だったんですが、そういういい言葉をあまり残してくれませんでしたね。

鑑：まあ先生のほうがね、いい親父になってしまくと、もう父親は要らないということになるかもしれない。

ただまた、母親の場合、母親というか女性の場合は、ひょっとしたらね、お父さんの言葉というのが何かあるかもしれませんね。これはちょっとね、分かりませんが。聞いてみたいと思いますけど。

山折：この場面がカウンセリングルームみたい

になってきましたね。

鑑：僕がいろいろやってもらっているんです。

岡田：初めの情感の言葉と今の母性との、母親との関係というのは？

山折：そうですね。私が一番母親に反発したのは、理性的な言葉を吐くときですよ、残念ながら。これが一番嫌でした。感情的な言葉なら受け入れたと思いますね、むしろね。そういった意味では理性的な人間だったんですけれども。

鑑：やっぱり理性的な言葉でしかるとか。こうせいとか。桦のほうが多いですよ。

山折：そうですね、それはほとんど響かない言葉になっていると思いますね。

鑑：感情的な言葉は、やはり包む言葉になるのでしょうか。

山折：それはどうでしょうか。先生のほうがたくさん事例を。

鑑：今先生は、お母さんが最期のときに念仏を唱えておられたとおっしゃいましたね。あれは何なのですか。先生はどうお考えですか、宗教学者として。

山折：寺の坊主ですからね。父親は養子で、母親は寺で生まれ育った人間ですから、子どものころから聞かされていたということがあるでしょう。しかし、私は、一人の人間として、母親のことを浄土真宗の信仰にあついと一度も思ったことはありません。

鑑：そうですか。

山折：理性的な人間で、浄土なんか信じていないのではないかと思っていただけです。だから衝撃を受けましたね、最期のときに。

鑑：最期のときに。

山折：最期の場面は、人間はやはりここだなどというところですよ。

鑑：すごいですよね、それはね。やはり言葉って何か、最後にわれわれを慰撫するというか、

われわれを支える言葉ですかね。

山折：どうもそういう気がしますね。

鑪：それもすごいと思いますね。

山折：これはもう、信じるか信じないかという問題ではないと思うのです。何でしょうね、これは。

鑪：岡潔先生ね、数学者の。あの先生も念仏者でしたね。

山折：浄土宗の。

鑪：そうですね。岡先生も研究をするときに、またほかのときにも、いつも念仏を唱えながら木魚をたたいておられたと。そうすると何かね、一瞬トランス状態に入って行って、そこからこうアイデアをつかむというか、そういうことではないかと。究極的なそういう世界に住んでおられたのではないかという感じがしますけれども。

山折：京都文教大学というのは浄土宗の大学でしたね。浄土宗のなかに光明会というのがあります。ご存じだと思いますが。集まって一日中木魚をたたいて「南無阿弥陀、南無阿弥陀」とやるわけです。そのうちにやはりトランス状態になって、神秘体験の状況だと思いますけれど。

その南無阿弥陀、南無阿弥陀の神秘体験が、数学的発見をするときの状況と非常に似ているということを言っていますよね。ああ数学の世界と宗教の世界と、ここでつながっているのかと思って。そのことを、あの方はちゃんと自覚しておられたと思います。

鑪：岡先生も情念ということをごくおっしゃいますよね。数学者というのは理屈の先端というか、理性の先端にいるようだけれど、本当は情念なのだ。あれもとても印象的でした。

山折：そうです。今、岡さんの話が出たから申しますが、晩年、やはり南無阿弥陀をやっておられるころのことですが、人間というのはどの段階で数学的一を発見するものだろうかという

問題を立てられるのです。

それでいろいろ考えたけれども、決定的なものがどうも見つからない。そこで、自分のお孫さんが生まれたときから、成長過程を観察し始められました。二人目の娘さんがいらっしまったと思いますが、そのお孫さんが生まれてから成長するまでじっと観察して行って、それで18カ月目のころに、数学的一を発見するのだということを言われました。18カ月というと一年半ですよ。

岡さんの言われることですが、そのころになると個人差はあるけれども、赤ん坊はだいたい全身運動をすると言うのです。その段階で、全身運動をしたときに、数学的一を発見したと。これも数学的直観なのか宗教的直観なのかよく分からないようですが、私には何となく分かります。

もう一つ私が不思議に思ったのは、全身運動をすることで数学的一を発見すると同時に、全体を発見したのではないかということです。全体という考え方をね。両方あるのではないかと思うのですが、岡さんはなぜか一にこだわっている。人間が人間として自立するのが一だ、一の発見だと、こういうお考えではないかと。

鑪：一ですか。

山折：数学的一ですね。自分の身体が、自立的な一つであると直観するということでしょうか。その辺はよく分からないのですが。

鑪：それは、何か印象的ですね。

山折：数学者と宗教的な世界は似ているという気がします。

鑪：いろいろな科学的な営為において数学というのは、その一番基本ですよ。それが情念的な世界と結びついてというのが、すごく印象的ですよね。

山折：心理学では、やはり情念とおっしゃるのでしょうか。感情とは言わないのでしょうか。

情緒とか感情とかいろんなそれにあたる言葉がありますが、やはり情念なのですか。

鑪:いえ、情念という言葉は、普通は使いません。

山折:使いませんか。

鑪:ええ。やはり感情とか情緒とか。あるいはわれわれの言葉ですと欲動、欲求、欲望というような言葉を使います。

山折:欲求、欲望と情念はちょっと重なるところがあるのでしょうか。

鑪:それは、とても近い概念だと思いますね。情念という言葉は何となく文学的な感じがしますね、言葉として。

山折:怨念に近い感じですね。情念と言った場合にはですね。何か蓄積された、ある満たされざるものが、感情的なものに包まれているということですね。

それで、そのほうが、病める人間にとって厄介な問題なのではないかという気がします。単なる感情、情緒という問題よりもですね。

鑪:それを情念という言葉で言えばね。

山折:そういうふうには受け取ってはおりません。先生がおっしゃったようにね。

鑪:まあちょっと、少し強引かと思いますが、話を自分の勝手な方向に持っていきたいのですけれど。

実際にサイコセラピーの内側で何が展開しているかというときに、死と誕生、あるいは死と再生というテーマですね。実際には先生がお話になったような、たくさんのお宮のお話とか、いろいろなお祭りとか、そういうものがありますけれども、結局私たちの心のなかでも同じ死と再生と言いますかね、生まれることと死ぬことが展開しているのではないかと。

今の自分を殺さないと新しい自分が生まれません。けれども自分を否定していく、殺すということは、一番難しいことですよね。つまり自分を捨てるわけだから。けれども捨てないと新し

いものは生まれません。それでも、今の自分にはどうしてもこだわりたいと。何が生まれるかは分からないですから、ものすごくその間で不安がありますよね。新しいものは何なのかというのは、実際は分からない。分かっているようだけれど分からないと。

お祭りのように、あっちに行くとお旅所があつて次にどうなって、そして祭りが終わるといふ具合には、心理療法の世界のなかでは分からないのですね。先が見えないかたちで自分殺しとか、そういうことをテーマにしなければいけないということが、とても難しいような感じですね。

山折:なるほど。

鑪:どこかで何か、一瞬飛躍があつて、先は見えていないけれども、ドラマはここで完成するというかたちは分からないけれども、とにかく飛び込む。そうでなければ先に進めないという、その難しさとかしんどさとかかね。面接しているときに、それを感じることはありますね。

山折:ああ、なるほど。私の経験なのですが、十二指腸潰瘍になって二十代で胃袋半分切りしました。三十代の後半にこれが再発しまして、それで四カ月入院しました。このときの体験が、今の問題とちょっとかわるのではないかと思いますので、申し上げます。

気がついたら救急車で病院に運ばれておりました。出先で酒を飲んでいて吐血しまして、そのときはベッドに横たえられて点滴を受けていました。点滴は受けているので、最低限の栄養は与えられているわけですが、体は限りなく死に近づいていくわけですね。食事を完全に止められておられますから、ものすごい飢餓感が始まるのです。二日目、三日目になると。これは本当に今でも思い出しますが、地獄の体験ですね、あの飢餓感というのは。

三日目、四日目あたりが最高潮になるのですが、不思議なことに五日目ぐらいになるとその飢餓感がずっと引いていったのです。引いていって六日目、七日目になりますと、体がなんとなく軽くなって清浄感のようなものが出てきたのです。栄養的に見ると、あるいは生理的に見ると、この私の体は限りなく枯れて死に近づいているはずなのに、にもかかわらずその奥の奥から生命力みたいなものがふっと湧き上がってくるという感じですね。ああ、生命というのは不思議だ、身体というのは不思議だと、そのときちょっと思いました。

死と再生といいますのを自分の問題として言いますと、自分を捨てることだと考えるとなかなかできない。

鑪：できないですね。

山折：ただ身体的に強制されると、そういう状況に追い込まれていく。そういうときにはっと気づくという。だからやっぱり身体論というのは大事だなと。そのころちょうど身体論が内外のいろんな分野で問題にされ始めておりました。ここだなと思ったのですが、ただそれを今おっしゃったような場面で言語化して考えていくと、やはり壁にどうしてもぶつかりますね。

鑪：そうですね。杵があって動けなかったら飢餓にも耐えられるかもしれないけれども、その杵がなかったら、やはり食べてしまうのではないかと、たとえ毒でもね。

山折：そうだと思います。たとえ毒でもですね。

ただあのとき絶食期間が終わって最初に飲んだ重湯のうまかったこと、まさに甘露だと思いましたね。でも忘れますね、すぐにそういうことは。

鑪：実際には、精神療法の一つのタイプですけども、日本でわりと古くからやっているのは、絶食療法ですね。

今先生がおっしゃったのとそっくりな感じが

します。二日目、三日目のあの飢餓感が耐えられなくなる。それを通り越すと何となく気分が落ち着いてきて、ゆったりするとか、一種の新しい生命感というようなものが生まれてくるとかね。

山折：絶食療法ですけれども、東北大学で戦前コジマ先生とおっしゃったか、心理療法、特に女性のヒステリー患者を治すために絶食療法を取り入れて、相当の効果を挙げた、50パーセント以上の効果を挙げた。それを継承しておられる方が、ちょうど私がおったときに、鈴木仁一先生と言う方が心療内科で、絶食療法を取り入れた。

その方が、絶食療法は効く人と効かない人がいるとおっしゃるのです。それで、それはどういうことですかと聞いたら、意志が強い人の場合には絶食療法が効く。意志のそれほど強くない人の場合には効かないとね。そういう人に対しては写経をお勧めしているとおっしゃっていました。だから我が国における写経の流行というものには、非常に大きな意味があるのだと思いましたね。

私の場合には、絶食は強制されていますから、意志が強いわけでもなんでもないので、そういう症例が非常に多いということでした。

鑪：つまり写経がヒステリーに効くということですか。

山折：ヒステリーに効いたのは絶食だそうです。

鑪：ああ、絶食。では写経のほうは何に効くのですか。

山折：いろいろな患者さんが見えますからね。それ以外の心身不調の方々に対して、この人は写経がいいと、あるいは歩くだけでいいと思う、そういうことをおっしゃっていました。

仏教の伝統的な手法をいろいろと心理療法に使われて、カウンセリングとそういう身体訓練を重ね合わせると面白いものが出てくるのでは

ないかという気がしますね。

**鑑：**ええ、本当に。われわれの心理療法の一つのタイプとして、非常に日本的だと言われる内観法というものがあります。

それは吉本伊信先生がお作りになったのですが、あの方は浄土真宗の信者なのです。浄土真宗の「身調べ」から、自分なりに変更を重ねていかれて、新しい心理療法のかたちをお作りになったのです。だから、そこでも何というか、仏教の世界と心理療法が結びついていて興味深いと思いました。先生も身調べについて、お詳しいのでしょうか。

**山折：**行ったことがあります、ちょっと暗くてきついという感じはしました。

**鑑：**ああ、そうですか。

**山折：**真宗的な暗さですね、あれは。そういうことを感じましたけれどもね。まあ懺悔の考え方とつながるところがあるわけですね。私はもうちょっと明るくいきたいと思いましたけれども。

**鑑：**あのなかにあるのは、祖先崇拜のような、お父さんお母さん、その上、その上と、そして自分があるという、そこをプラスの面で見っていくと、感謝の心がだんだん出てくる。懺悔心が出るというそういう動きでしょうね。

ところが、われわれが西洋から学んだという、まさにわたしがやっているサイコセラピーというのは、西洋的な感じがします。このように世代を上、なかなかいかないのです。そういうところに大きな違いがあるような気がします。

**山折：**あれはどうなのでしょう。私は日本人の心身の安定には先祖の役割というのは非常に大きいと考えます。

**鑑：**大きいですね。

**山折：**ご先祖さまの気配を感じて身を慎むという、そういう生き方をしてきたわけですから。

だからご先祖さまを軸にした身調べというのは、本当にそれは合っている。

**鑑：**身調べには、その伝統がきちっと入っているのですね。

**山折：**ところがどうですか、西洋世界、キリスト教社会では、神の前で身を慎むわけですから、やはり非常に遠いかなたに絶対神がおいでになるということがあるわけですね。

**鑑：**絶対神と自分との関係ですね。ただつながりというかたちではないですね。

**山折：**断絶ですね。そこが。

**鑑：**先ほどの親殺しで言うと、親は乗り越えていくものだと、それでおしまいと、そして自分になると、そういうことでしょうかね。そうすると縦のつながりがちょっと薄いようですね。

**山折：**例えば遠藤周作さんの場合ですと、超越神、神が内在するという日本のキリスト教徒の体験を語っておりますよね。

**鑑：**そうですね。

**山折：**だから超越すると同時に内在する神だと。それから恐ろしい神であると同時に、許しの慈母のごとき神だということを言っていますね。

精神治療、精神分析というものは西洋発のものであるけれども、それが日本で土着する過程で、遠藤周作的な、ああいう変容があって当然ではないかという気も致しますね。

**鑑：**それはそうですね。最初にご紹介した古澤平作先生が、まさにそうですね。アジャセコンプレックスという言い方は、まさに母性的なものを非常に大事にされて、日本のサイコセラピーの違った要素としてお考えになっているという、確かにそれは感じますね。

**山折：**プロテスタントである賀川豊彦が、自分の個人雑誌の中に、神に溶けるという文章を書いて、これが物議を醸しました。

自分のキリスト教の神様というのは、自分の体のなかに溶けていると。自分が神に溶ける、



神と人間が溶け合うという、一体化するという。これはやはりキリスト教の正統派にとっては異端の思想なのです。ですから、日本の正統派からあの人は批判され忌避され無視されていくわけですね。あれだけの仕事をした人を、今は顧みる人がほとんどいないという状況です。

しかし実はここは非常に大事なところで、キリスト教が日本で展開発展してきたのには、どうしても賀川豊彦的な考え方が必要ではないかという気がします。

鑪：日本の場合、常に包むものとの一体感ですよ。

山折：そうですね。

鑪：そうすると、神様というのは優しい神様であって、罰する神はあまり出てこない。罰する神が出ないと、われわれのなかに罪意識が出てこないということになります。罪意識のテーマも、日本の場合とキリスト教圏の人の罪意識とまた全然性質が違うという感じがありますね。賀川豊彦先生のような信仰は非常に日本的ですよ。

山折：私はどうも、西洋社会の人々の人間観と、われわれの人間観は根本的に違っているという感じがするのです。どこがどう違うかという、これもちょっと極端な言い方になりますけれども、近代西洋社会が生み出した人間観というのは、人間とはそもそも疑わしき存在だという考え方ですね。

鑪：そうですね。

山折：ただ疑わしき存在ばかりでは、それで共同体を作ることができるのか、国家民族を作ることができるのかという問題があって、そこに二つの条件があったような気がします。その一つが超越神信仰でしょうか。個々の疑わしき存在を超越的な高みから絶対神がコントロールするという、こういう関係です。これが一つ。もう一つは契約の精神。それで疑わしき者同士を

倫理的な関係でつなぎとめるという。その二つの条件があるから人間はそもそも疑わしき存在だという人間観が可能だった。

日本の社会ではその二つの条件はありませんから、ないところで人間は疑わしき存在だと言ったら、社会そのものが崩壊してしまう。そこで人間はどうしても信頼すべき存在だという人間観が出てこざるを得なかった。

出てこざるを得ないのだけれども、にもかかわらず、人間は裏切る存在ですよ。信すべきものだと言いながら裏切る存在、これはジレンマですよ。このジレンマを乗り越えるために、どういうモラルを作り出したかということ、私の考えでは、やはり組織を大事にしろということです。組織によって個人は守られている、組織との暗黙の契約のなかで、個人は個人たりえる、そこで信頼関係が保証される。

だからヨーロッパ人にとっての神に代わるものは、日本では組織、集団なのだと、だから集団に対する裏切りが一番の悪だということになります。

鑪：そういうことになりますね。

山折：そうなるとうなんでしょうか。カウンセリングの場面で、この人がどういう組織に属しているか、どういう集団のなかで生活しているのかということが非常に重要な問題になりませんか。

鑪：重要です。とても重要だと思います。

山折：だからヨーロッパ的な意味でのカウンセリングの場合は、必ずしもそこまで組織や家族のことを考えませんよね。

鑪：まず自分ですよ。

山折：そうですね。

鑪：組織によるとか、あるいは誰かとの出会いによって支えられるとか、組織の前に家族とか、あるいは友人とか、そこでしっかりと良い関係ができるかどうかというのが非常に大きなテー

マですね、日本においてはね。

**山折：**そうすると、今の家族の崩壊というのは致命的なのですね、日本の社会では。

**鑓：**どこまで致命的かどうかは分かりませんが、どれも。

**山折：**それは先ほどの母の問題とかかわってくる。

**鑓：**母の問題と非常にね。だから母の持つ保護的姿勢というのと、今度はそこに守られた子がどう育つかというと、心理学的用語を使うと自己愛的、あるいはナルシスティックに育ってしまっていて、今度は他者とのつながりが希薄になってくる。そうすると今のような家庭崩壊的になる。あるいは自分中心でただ周囲は利用するだけという。今日本の場合には、ちょっとそれが見えかかってきているのではないかという感じがしますね。

**山折：**そうですね。

**鑓：**そうすると、母性社会、日本独特の病理のようなものがあるのではないかという感じがしますね。

**岡田：**せっかく話が弾んでいるのですが、時間ですので、もうそろそろあれなんです。

いろいろな話をさせていただいて、特に京都文教の臨床心理学部の誕生というか、その記念です。これから臨床心理学部はどうなるのかということのを連想しながら山折先生の話をお聞きしていました。

誕生ということはできたわけです。人間には死がありますが、京都文教大学には死はないと思います。そうするとその間に遷宮というか、そういう行事をしながら存続していかなければいけない。そのときそのときに改革をしていか

なければならぬと、そういうことを思いました。

いろいろなお話があり、しかも心理療法について、いろいろと連想するというか、そういうところを楽しみながら拝聴致しました。特に一歳半の子どもの数学的一の発見というところが面白くて、確かに一人で立つという。そういう意味で身体がどうもできるのではないかと、それと歩き出すということのを連想しました。

新しい学部の始まりにふさわしい、誕生というテーマで山折先生にお話ししていただき、また大勢の方にお集まりいただきましてありがとうございました。今後とも京都文教大学の臨床心理学部をよろしくおねがいたします。

**司会：**山折哲雄先生、鑓幹八郎学長、そして岡田康伸学部長のお三方でした。まことにありがとうございました。

以上をもちまして、京都文教大学臨床心理学部開設記念講演をお開きとさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

(終了)

